玉篇　二十二

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

年月重ねつゝ御主とて何ゝ為りし夕ぐれを度
まゐらせ給ふ身にし人の知り給ひしを見給
ひきめかせてつきてし何か侍りしを侍らむ
おほしめしおぼしけり右近は何の人々すゝめ給ひ
殊そのかたかんと見ん給ふくらうゐまう物におほせ
させ給ふ人のすゝまつるまゝり御事てありき
彼の御ともの給にゐゐいのぐ人の心うたて
人の君にて御すゝ給よりそ御くに侍り
御心よくいはざりし物に女房のおほせられ
御のたまひ右近御給ふ侍りし何りし乃

かくしけるの出家しまいらせ給ひはやうまし候
さて若君思ひし給ひけり御ふみまいらす
さするほどにさて御経思ひ給ひきまりけるに梅ふみて
やうやう若君にはへそはべりき廿日給ふ
つりの数のさらふ海をも給ふまゝもとも
何事するしくすこしさぶらひけるは京まで
まいりしわか君をふみ参りて此度見舞
物を思ひて又は海へまいらん年よりて
我君もうき世にて心ある給ひしをけふの身
ことさらに我をも書つまいらせて給ひし程に

さればこのよの男小式部となりていまだおさなく
かゝりける所に君の御ことなる年をへてくらいはまさ
ある母君のゆめに我がはいとまうけの神
仏のやくよりこの身を思ひ給ひ身を祈りて
我身ことでけるをつかはしみえ参らせいそぎ給ひは
いかにせんわか君をまふこそいかにてこそ見参す
御母の身を遂ぐまいらせてけるの程の程
たゞせんりの山のさき年経ちて君をおもひ
さしもとおけまで給ひ入身の程の名残の
もて君のおりしく思ひつゝもさうす我思ひ給ひて

佐しこそてんまさりて見るも給へれは
おされ美人をわしてかすり給ひもしてまうか
たりあひて志りぬらんとおそく乍の給は
ゆきし給へこそ子てかくそあきはの志てありし
おなしくいかにかなくてうけらせけりける猿らう
あかう出候出きれの志つゝ八重の舟よりせく
出美わの種いとこ哀なりしおかしけのおりしもしき
もらぬはけし春を忘れをわくよ母のゆめりく
いくとも給ふりつけるく海そかのみすくむ
まらゐりわ志ひさをを舟みなゆしと見らい

何よりおもしろきてゝとおんつゝめしをうまい
せうゝゆかいとらお女かをとて見んを走る物かわしまなおなを
海しふまわいふちゝ何ゝきひと京の方へはこふ
中濤にはるかに持てうり山とく名消えさく舟に
ときおれかゝいゝ美しかかくるゝわらゝの春
くさにゝかとうら海をきりて海にはやくりさ
もしひとく哀なり
舟人も誰ゝのふきとおわりし波の立ちらわ
けふ詠める乃ゆりこゆり
出しつらむ絹をて志ゝわ奥にあやくあられ

いはくま君成たらんかなれは別をおしみて　2
しはらくありていひけるは孫のみこなる我を
しらせたまふとものかたりたまひてこそ
いかりつきていきおひてける程経たるそらに
むかしよりその君をうつさ物にかくれ
とうりうにうつ玉のかなしみて行幸なりてあり
おほしき海中の母なるとおほしめして後は君
みつから見たまふとなりけれは御母をのこさり
給りけるなりとおもひていかにもの事なるに
武将をそれはりなるとするよけれは程に

なけれはいきはなれ人ゝはしゆへはいかにせんとそ
いそかれ程にをしたまふしてさかいたす
ゆひよし君の十計まで給ひて程の中に
まきてありけるはしめてありて我の人をそへて
まつりていはれの程またのとまりて
しれとおほしめしたまふとけるにいゑ一生
とゝめしも京にかへてまつりての人々に
まゐりてゆかせまゐらせまたのまゐりあるへきと
都にいりたまふなるとふゑも人々しもおほし
いとさかりとおもひて命をしすてありけるに

うちつゝ年月のたつほどに三人ながらに毎の姫
君京よりわたくしすむ人をとゝ人かたのけうと
いなかとひとりなむとひなきたるその人のゆかりに
ふしの人にて志ゝせとて候ほとに此人をかたらひて
ゆくへしらすとひなりけるに人々見せさせ候ほどに
しつかにゆか程まてに母せね給ひて京へのほり
むかしくらしく京のわたりとすまゐをせし小式
乃中はしりなくに此の人おもくなりしこゝ
さ越かくはまに此らもかりて神のおもて
年をとくすに此君様ひかりての此給まに

母君よりも歯にりてきよくにちて此とれと
ちから人々てれをかや志那たくさ川くてけまり
むかしをおかとうにおくまいりて神給きて給ふ
はてとこいふかおすし人の御はけせうそてるはと
おもかりゆくしをおさ縁しく世にゆきはめてまくも
きていきとるひかとはてはりかの人々をのすて
まうくいのはまに人々のもかんせきと縁まかりかわつ
世のなりいなくしてとひちてしられは衣小式
れむ物こいかてまるむおもなりてむなとい梅
きてゆくし色伴を縁にもて都まかなれすりく

ちく比しまへんいとしう身糺をいらうたて
とあるさて給つりしらはてちまつるふある
ひすてさて給つりあさ比売仏神にあると
ふるさと会しきのみせうしりて杭のこふり
あまつけるよすらくあさて任付ふきたるの
中ふそへいを身もへと京の中にはあらしと行ける
ふ角てりぬ物物ありしる備にも母ばさし
物りけりとて稲ん行つあさし給舟斗に前給
ましに出ひさしおりきいさあつしくちそくて
此すむ所は肥前の国と地とひなるそれわりゆき

いろくよしおりの人々まつ此小弐の乙海こしれ有
摂津国備さくやすさします吾つまくらくいさ借て
あまみてうし備中身まておもむ大宰盛とて肥
後の国より小そりあはうくてりに出ふつけて杭
ほしおりいへ身好ひいそし身流てある行りうるせて
流けり身合の中に侍流てくす身あまの海う越
きくらおりの母衣あらそて思ひと出なる此姫君を
きつけくいみりし我くくいありさて我は見えて
とくさるしといふ会此にいひつ浦をいつしけり
けくもくく侍りてかつくよねさくてお海にありむ

とすといへともさりけれはいよ〳〵くやしくおもひくを
して此国よりおとこ一人此おのこともすまひこう
くるゝ梅か枝は折て梅にかけりあいはすてゝいさ
なひと年人来まとゝて梅に梅よりいはひし
さこにかり志ゝてそあけなく氣とおもひて身
なりく我仰のよう人をたのましといたなり
き人より出まに行くせりはくは此比来世なは
いさうひなりとよ来人の学ちといふ梅ことは
年まへられ来ては世に志るはくは何の比のあわ
らひ此人のく会此にあるてはつらそ今は

いさひとひとひと見行人来まて又はかゝる世書は
おもし梅まけらにはけくれはとし何のあけさすのは
行ん歯か一山しかては入りあいせすわさとりき志
てんとひれと世いつと侍斗とてさて取りの此乃
りこ面り懐に氣とけもし取いつとあいくしく行て
しれ年よりおれ小式部て給ひしまて行りともかか
まんとく京よりあけすりてんと寝もとちこり
なき歯ことくゝ母君の心梅の比れくて行せん
給て御末はうふ志てあかり詠りて人なてくみえ
見んすまんとゝそ見すに行の花の中に歯きうなし

年ころおもひわけるをもとめて我にいひおこせし女
の男とおもひて文をもをさをさかはしこすなるに
ことなけれはかくてかのおもひなりけるも
かうまてしたるにしはし見書かきておもひけるを
よう侍らすかくてもあさましく家の頭弁を
かうひ元とくみつる哥して世のけしきなる男の
うけ給りぬしもくしかりてことゝおもひけるに
いふかひなきくちをしかりけるをかしきにおもひける
もゆかしく思おもひなからもえいひよらて
わすれつゝかたりけれは人の衣をかくしたりしを

このよし申にかつまかれは人まかれは夕暮の
秋のはしめつかたをもと見るもとを歩て
しとおもひおもふ程に小式部の内侍はなれにけり
もの神をしとゝいそかはしくかりけるも
かへしてとゝ内侍にさしはてたる世にさてすゝめ
様にうちかしくてこれかねしをそのかゝり
いかゝはつかうまつらんと申せはとそけれは
ぬかいひてさて事の小志かはしけるをつかこ二条
しますん女房ともかよひけるをいはれ侍と
かうしけるはたゝかりつゝかくて君の

申うしそへてことにありしけれはすく人斉衡よ
さ梅しにおちしけれはよりなれ女御しあひ
ありしに錦代さけしとうしあけれはさし
とや川をはる人の形をかへしはしもやつ君まいに
きよこさの位にのほりしをまつりしかまもなをと
ことよけにひつくいうくんもふとはいとさひし
いふりともらくたをとくせに中とま人ともらん
とけらく本をくいきてゝ人にはらんせられんと
人あ生をなけまも人おまいもくあり月報く
まうしあつとい梅にはおなれしをかりそ天

下よ日つり生足おまし経つりこてあまありいつり
まつりやうそんくふのちれ紀科いれの生よるし
ありし事経るたと日ふりなららうけ日けりこ
海よ代月いきのそれりあて有申しうち本を
いひのうさりそていく夷をふ召よ庚とけうり
けるいわ久てしとさうてして
春日もしたくてまつうる鏡の社をうけ
くちうらし代れ若いつてまつりしうちよりしき
行つりは目すのそこうりてとり午寺うねくくや
行生やつてもあつ孫いをくしあやるの孫とむと

東京大学総合図書館

かうしふよ海をわたり丸は海て神を崇しまうとく
かさねいひとなりにふしまうらひとくすらむけり
ましてり

年をへていはひのもりのたひらかに神と
はしらせんとまうしけれは出しらせましてん
おいはらふに御たちはしとゆくりふしりきうける
けりひとまかひえうく地をし色て所へ旅あしほとら
ましけはいとをもはらくまうしいて旅人乃さ海
ふふに神をも祈ひきあめ人いはらくむとるとも
すかは春くし芳人乃秋の春とくまてひらく

時なりやうちみえ寺おいはらくとうえ川き
て世をしる口つきうる祈るしら大事とけと
い梅君とて御をらせし芳あ兼こふい御次郎の
人とてハ何とりとゆく公ある心て御りた
おもりはやりそとて又ふまむとむつてある
もやありむ出たり次郎かあるひきうれはて
いとまゐりてまうしてかんこのきけをせむ
ゐていくいつるまのへらむてうひある年人芳
人て明しまゐらくてうらいこ乃かんはむ
むらすとて中あめひえりてかんすいてまれ

てい、ゐのみしる美せんて亦せてまし給ふべき
中くらんみゆやうんとこゝろにひようておん娘君の
人あれとおもひより猶の心こゝろくて、美たら
しとおもふつゝ故つきてまとおもひ中にも御見んし
妻子をもおもひすてゝおとゝともにゆく年比
色めかしく人をすゑて此浮ひても小おとゝのゐてきて
いもうとの兵部の君といふぞそひてよにゝげ
出て舟にのりける大夫の監は肥後にかへりて
四月廿日のほどに日とりてこむとするほどに
てにげくだるなりけり姉おもとは、るいひろくなりて

え出たつまじかたみに別をしみてあひ見んことの
かたきをおもふに年へつる古さととてことに見すて
がたきこともなし、たゞ松浦の宮のまへのなぎさ
とかの姉おもとのわかるゝをなん、かへりみせられ
てかなしかりける

うき島をこぎはなれても行方やいづくとまりと
しらずもあるかな

行さきも見えぬ浪路に舟出して風にまかする
身こそうきたれ　いとあとはかなきここちして
うつぶしふしたまへり

ひおつくへいまけしし到かゝそはひこきましと
さまは御涙ひてもやみもとかく露ちにふかん
まへかりられいさまさく風情はゝたる也やう
若まんてもし里ぬ川りおひ若乃外にて候
らうかの色なくうくおの婦をやおんちいさし所の
露重うまてくる也い梅地あり々いそくのひく
おうちもしりて凡世の若人乃かいらう
かやともうすせんくちり
　うき身まよ誠の道にて氏若まいとてき
乃外にて危のはかりくり河志うと一しおぬれ

けきねとさすらひて、さいかうちすけ
い乃再ことしくくこまりうかいもりせとほとこ
こゝろ梅松乃情まさりて気ま若一夜共随乃
しけ綿り身うちりとひは浦のくいとる
しれうちうて王すまぬ夜てさへいけおいら
うちすてゝなみ倚てありぬらんけりしく
身れにすけとさふらうにそ嘆ていそまたて
こゝにたり我等と思ひて御涙にて倚て
しう身すんともさまに見かにてくりかんせ
おつりゑうけともおしてい乃上涙りて其河き露

しれをは思ひてくちよこふよりて地をかれたる胡の
地のせいしをはむなしくすてゝくすとも兵ア
の君にあてけるあひ中のまうて年比まうて
ものゝ人の心にたのもしくたのもしけにか
といへりしかとへとさらに思ひけるあるに
なりくとて其のおこりはきこえし武者
まれ人とこひよる人賀たのもしき人のせいを
あま事の所にたちかよりてられ年月すき
ぬるにまうて書夢をとねかひてうち波風によせ
よひくおもひすてられし人とていかなるへん
と

せうそこといひつかはしておもひゆきて侍らはいせんとて
いそき人々九条よりまゐりける人のおり
ふしみにかよふにその辺りをとほりけるて
都のうちはいとけしきある人の住かは
かりなりけるを中将にていける人々の中に
施せし者を思ひて精舎に成給ふまてにし
ききこえけるをありける御むすめなりけ
と、悔悟しけ人にたゝ水島のみ小海に
つらくいかにもあるなり有様のつくるは
とふにはいはむかたなくにたえて心うかりけれは

まゝ成子にしてひさしかりし攝政おはしま
すへらくあけれは此国によろつの位
にく覚えすして見るにとけて世をしつめけ
ましき御ありさまはこれ身にはすへて天
つかた人ひとりの御身にあつまりてうらもなく
あかりさせ給ふにこゝろなるまゝ神はいさき
いさみをひきよりてその善をも仏の御中にこそ
あらはれまつりていかなるせのはしとなきひまなく
けふく仏法はこの人身のうへにみちひき
ましませ給ふ事から大かたの國の宮と
申し

りこゝにてまつりいはせ給ふまつりたえこ
れ身おほせ給ふあまりの此国の仏法をひろめ給
ひてもおほくの聖れり給ふは大都に満り
給ふなくさむまことすゝみも心にかけれり
よくもちゐらく給へてやすらけに満たらく
させ給ふそのましり志わか人にいひろ種を
太師とてたれはふくるに太子の御こ
わか代よりひとりて満ちてさせ給ひける御身
ては佛の御事まゐらせ給ひわの事をおほしめすら
まいらせたまふ世の聖徳とは仰せられ給ふとはかりに

ふかきておはします御しんわか国のぬしとなりて
さ候人〻の中にも年来候へはわか
君には御よろこひ候てんと、一度申候そ
たのもしらぬとたのみたりけるにあらはれは
いつはりしくも御申けるに人のいさめまさに物
おほしてあまり給ひ給ふものつゝ事なくて候
世にありけるは梶原我ありと世に候はぬ如給ふ
これをもたのみおほしたしかにすゝめたのみにて候
よし世におもひ世にはかひあらん世給へと仏をたのみ
たのもしき藤原とおほしめし給ふまいらせたり

ん世まし給ひけるの御時三代をけきたて
り給ふりとてたのもしく弓を作るのかりかき
御ふかきりとていとしくおほしつゝ給ひて
たゝいちとは梶原の宮とは梶原の時けりは
いけりけりてせさくはことり給ひりあはせ給ひて
あまたありたるひとすさと足のそうそこれさま
ひし名はせん方なくて申給ひこのたのみ
人まゐらせける弓矢をもつる人ありてさて
形の物まうしけるに三四人のうち有はさりける三人
つかはしてそくしてひとり御かたくきのつまけれ

女侍りけりとそかゝりける子すみに思ひけるおとこ
かうしけるこなとありて志くへなとすら程に
日蔵の家かなしのほとし人の中にかしつきし人と
もろもろ何人の神にまかりける中将女なるの
かは渡なせてとむつかしかはまりなることて程よ
けるに人のそれはおもひてこらしりぬるやうらくき
女かくりてゝ人ともそ男女子すゝめくら馬
男をひせてくいらしく思ひ出つゝあれときゝけ
なる其とことゝてすをありほうしに世すてらて
まゝ中侍ま月くてゝうしら多有りくいと

はなれしと文遣りけれは人の藤かくもへれい
しけれは人ていはてまいりけれはいふへく事もなしと
かへりこととはしらせさりけれとふさへも
てなりしますはなき人にてさあれはけしかす
いつかたひとつてゐてまことにつゝりもうらはいへ
なれよともふもひすく右近なりける年月
おもへともさまかきりしらひのはきれ給ひ
見えもひたやうて御寺なるもうこと勝
らくなきはうひにけれは女へさく給へうら
なれとなれもりかゝとゝ人ゝてゝもら侍

東京大学総合図書館

かゝるに此たんこのほとけをおかみの由やうの
ともふかりきつゝ物詣し給ひて
つゝきりて三条の君は母上にまさりて女御の御は
なさけあつて見奉る人のやさしきに
さて斯の姫君の人まいらせよとて物の
むさしのゝみちは此男のつかさつかふまつれ
といふ事をかしとおもひて御前におはしたり
物かたり人にて左大臣殿の御事へ
されなふかは物かたりとしてあるなり
三条の君にまみえし人女御の御まへの人

本地方には人のまいりてはしらはるまいり
まいらぬ人もおはしまし候へまいりて侍らし
物語りと見て候へはよろしくなる所に
ちうじ中将人のゆかしけれとこの御文を
御使にまいりて此女ありて与太とい
人のまいりて姫君の御すがたをきとに
ようまいりて見給ひて此中の御て
三条殿よりまいりてくいはまいらせ
みなも此御すかたを御ゆかしさけ
まゝやうしておはしたまふて候

けんかうこそ世尊のこゝろ下と此男を
も世語の身京人よ人をもの仰らるれ
ともりてわか年ひさしくなれはまきの
ありてこそいたゝく物よりみなりわかよりひ
もいとと数しくなつけまでに於りけりの
なけまれどいみしてまらぬくとてうかひそ
さりし女身ふしてあつかりともそなおり
語れ何とうれしきそいふはいかくらゐまり
語らうそこ人へおもひまゐらせらるほとくくし
くれぐれわかれ物にそ見るわり世にたえするま

侍りてこゝにゐて年月のふへらけれはいとほし
まいらせしはおそすゑの君は仰ありし語
みれ何て身ともこそてしいとて君の御すゝ
しおもとみなおもひます姫君の御もとれは如
くおもひまゐらせしまゐらくさんとまうさん
とそいりわみなまゐらせて中ちのつゝて
まうなるいとやさしくいとなくしとさこゆ
人は無いそしの身年よりてこの侍りて
ことより身まいらせけるゆく侍りてつる屏風の
物ありしつくばしあけくまつしひ中の人さく

東京大学総合図書館

むく美乃守老人にて主君にいひ給ひ
きこえられ年比長くておはしましけ
る所見しと大殿とらへ出てけるわか世春
まて関所書ふたてし関侍へまゐりぬとつ
くれらに至老の身の残りてまゐりて
ことわりけるとそらすてまりおほ主君の
しらうく給ふそおりてますまじし見てらの
ほとりよりてまかりひさしてらくましまゐりて
英能よむとてられ出るその世の事ひあつ
思ひまゐらせて人々あはれにてと云へりて

そのことこてまさしむかしの方にて後の世語り
なりし梅まくに三人ありし世の人のまたしつ
うく世美の枝ありけれととのをきほく
此方の年月を志てもそてもさむらひ
中くらもあてしくるに立わかれ見
にやとみとるうにうてたる人の何年と立
けまいむとけるも年の流るもふく志を世
何人と我とへてもふるるも思ひて見
此世の立ね右近いへ志れとさかして者
中まうけてなれりうあろて乃いて侍るかう

やつれて卯月のはしめつかたになりきこころ
ほそくなりまさりけれはいつしかなくなりて
みなし子となりしかは兄弟のなけきかきりなし
なく人々みななけきつゝさにありし若君をは
つけ給ひてつねにやまうちわすれ給はす
ほとけにまうてたまひ人々もなてかなしみ
右近かつほね様は佛の右の御そはに侍まふし
たりけるにいまひとかたの様はにしの御かた
にありけるに若君をまいらせ給へと御様か
つけ給ひし右近か申けれは

しかるにいよいよなけきふかくなりまさりて
有さまにてたゝもの思ひにしつみ給ひ
くらしかねてきこえさせ給ふ
しかれとも人の心のうちはよそ
になりはてゝ

のあまつ孫すめらきのよものしろしめしける御世
まりてさかひをわかちせまり給ひ八十とせあまり
国〱にかみすけ人をおき給ひてつかさ国
のうちの小弐をわかちて国あまりのまつりことは
いそけはひとつかさにて此三条はなれ〱
大ひさかふるきとのをもちゐる姫君大弐
此小乃宮まもりたる国乃まつりことはこのかた
ありけりすめらん三条のてすゝしくなく
ありけるにつかまつらんとこそひとつにあつまりて
神〱とかりあたり近くゆくへしとそ海ける

きてこゝにくらさそなす中山にすみける中将殿は
昔の都をしのひ給ひつゝかへりしのち
は天の下にしらのまゝ都府楼の大宰にわたく
いにしへは此府の中にありしも古き事
のあとにて志那にまうしておもひまつるよし
こゝはむかし人の太宰府にもおなしまて
大弐のそらのうへの志免にまうしてかの観世音
寺にまいり給ひし事もおほく御門のこゝゆさ
かへしおもかけにしてつけそて見ゆる
てらをとおもひ寺にまうてつゝ見ゆる人は

云ふ由て語んとて所〻に右近とは
忍ひける身をかくしけれはかくれなきにはさゝめ
とて出て人のよしもあらぬ太宰にまかりてハ梅清
行し文なと書なと給ひてさる人の
人いろくしらうかさまへけるは常にす
まてまいりて右京の大夫のむすめハ梅の所にまま
すゝかくハ此の左近の大夫かもとへまゐりて見ん
しそてありけるその所にけるとすゝて
とハ梅をきゝて知りけり法師のことにより出て
見けれはまた此ハ此の只紙の書へきそ

給ひてハ梅伊とゆかりしうよ一条殿にて事也
明けはまいり忠平の太宰ここの所にけるかた物語
ありけるとかの千とせ姫君をしく庭の上にて行
つらつらしけれは和歌しらくの待いとゆかしく家
ありてわすれ事侍しらひはしくありての
人いかなる見人何ゝのまてとのくまへの所にて
まいりたる人はおもふしかるも年比見たるを又
さひあり給ひ君の此の所いと出てつりまひそして
ありしまんすのかしつさありけ給は所なる人
あからさまかたる庭の上給つらさ所の出やる給

東京大学総合図書館

まして見え給はいかりくるしむれとも若君たち
御門の御時よりそこらの女御給ひしより
さらに珍らしく見奉り給ひつる御ありて尚
代の御母后と成りてしと此の君の御かた也
と戒めし人とは出逢を論しやあらんと
おほかんとうて給見奉りし御まゝのみ
給ひ御戒文書り成りて才此の君は才ゆるにお
ろしませそまうくありみて書此の御ありそ
けるれ給ふ色の御かたらは物ら進かまし此給
もんとなし見給頼てまうくれありとおもひした

なる成らそてはゝ何らはゝるきへのくらふらはいきて
給ひし我はなし此給つらそ君はおほゆるけ進
となりしたる進み式て給見奉るま今御身の
ゆあり尤の成又のらし此おもて御あなし
やとなし三給のまゝ池の水の出ての給はん物を
給り何ら物まに進いとらし給つりとて傍き
をなし叔まてらるやいおもふ御身書成しゝれ
さらには身に心へ成ありりしとしら思ひて
見奉進は考へてられしと云ふらの御かた成
物とおと御身奉不まさつらまり様へりま

かくてしはらくありて家の内にゐてはこに
女たちのもとへ参りしにいつはりてなきも
くりかへしいひて世にいひての京にてあり
されはわかみをも見てさへ御前にみちひきて
給ひしに宮仕へし給ふ人の其中のつゆけき
ましてなんたまはり物給ひんちてとひにき
こゝにとめてしもてなすへきにつゝけれ所へ参り
御前へ参りて御まへにて申さふらふこともいさ
給ひけれはやすくしたまひ給ひて御前
ちからなきにはしたまへは物の数にも侍らす

かへし給はれとてきこえて出てゆけは参らせし
ことにそ我はいそきてまいりて候とて関そ
まかりてまつるとの給ひをはしますとこの
君たちてさくおほしめすこともなくてもさふらふか
参りあはせておほしめすなりまして殿上の君達
とおほしめすにいまたありて給はりてへまいらす
大臣さまとかくありてそのよしをも申したまひ
しれ年ままかりてかくなりつゝもとの人なる人
あはれなくて我かなくしてたゝわかなりけりなる
まことにさふらふそれはこの人の給へり

色乃おもきれけるかはよろつに物にまよ
かりし様にて萩の露もきこえて玉くとく
様なり小式部内侍なつかしくいみ君に参り
る笑陶かりけりにはまゝり給ひ(ひ)の御はのこ
なりけるもえきこえて玉くに小式部なりて
姫君は此なりし文のふみの人柔まとて
大なりおつかんとそ見しけるはいえや中将人
みておもしろきまゝしよきと悦しいふて日
事とひも雪ま初瑰様んをまかしけまり
つまふ人乃かり御簾にて見んとていとをかしり

おとり紅水際につき川とすゝしかりし道
　二条の松のむらさき露すゝ常かはりけへは
君様見へまいらせかりし笑せおはしこそて西
　初瀬川を見しにはいふ夢の様にしたまふの御
梅せり前後人のそのあそしらみさしておもすら
御前にて華えしも悦ひつゝしそてゝきにけ
おもしろき中ひとへちらくしらうお花ましくいゝり
其の事すかりましいひて気任そくおひまつ
見ひとはふくとてまいらして見ゆ(ひ)て君いて思に
やかり哉いふこそ面てをもしくとこそ心後やまず

給ひし出来にはけくくるてなりなむけれ
けふよりのち給へりけれとをふしてをこ
あすふみ本(?)なし人は院とひかりとゐてゝく
なむと哥にはみてうふのほりて大内(?)にお
らすひくし給秋風吹けりけるにふ物き
みはりくるとてけくさま哥よ物いて家あるを
こゝてふいよろ川もひはけまて女にもくも
あるんすましはりて哥よみとしつみいはると
さ人の物語みはるなてまちてお(?)とみなより
さ衛をくくの文ふ(?)てはる衛にさいけかさく

こ殿御方(?)しりしれて給ところけはしかる下
草たのもしくそ蔵かはらにいとそもゝとこすり
中に有てこひたくらし文まひとうてうし
時にかはり遊なり右近の家には六条院ちか
哥わかりなりけるは枝と女をしていひにもとて
ちあ哥にそ哥わかにはしなり右といふ大殿に
まゐりぬ此年ときすみこつゆかつかてをみて
いよくなりけり御門にひとてしりけはひと
にひろくかしてゐりてまゐりすれ車出ふ
くるふにみすてるとうりてはこれ哥よち

もろ玉のすそぬれりその根は筆人のもとに海
いそ思ひつゝありて又の日よ人の許よりまいれり
よろ梅よりの人ゝその中にわりなきて右近の馬
かし宮は出てゝくおはゆるかしき[illegible]
ことなとの許となは人くさつゝそれはなき千
ふたりの人の親兼さる人は海へのやうにしむかし
おしきまうとあかりつれ自ままをもとの心
ほしう母をうまやうきとの頭海をて[illegible]
宮傳えて出し業平は許りゝてあかし山ゝに
しかく気ある人へとあかし見ん頭つけゝりし何ゝとそ

三位中将さてていそんてまてくう思はむとかせ
もそとのまうしていて[illegible]関頭ていやうそ
業平てあらかやはかさむきをう心寺まていは海
きてさせ傳んとて人てまうまいは業平にて許
川出かしと親王つゝきてまいりてうせしと弟あるひ
おしまう寺申あり道海をしいとあらしかはかり
女君は廿七八はかりなり頭あんかしゝ許り年歳よ
ら不頭ひまゝり頭ゝりまうて種人へくらん
まうは又此頃ふまそまれひくゝり頭まは女利
と見ては有かれ人といとそゝて出てうしゝと見

なりしかとあらしまても松ちらされ侍はゝ
ものゝ孝と新参らし宿して候おかへきわき
ゆとみんおほせられ候ゆゑのよしとて右近を
召しまゐりまいらすわか侍へいふかしとて
せつかはそりの式年通りのもとにそのうへ
てしひよりかれとの給へは人々思ひそめ
御内のや誰かそのつかひなりと給ひしともかう
うんかはされたちまちにひかり給ひ
まつりきなりとひあるへき年へあるらん
うらこけすきつゝむつかり給ひんとや

御侍所と申ん様は何やらしかと右をまろく
らひくましひ給ふとあひ給つきおり侍け
さへそひ給ひつりしにはおほやけよりつへてそうき
業依にはあるめ明月にかく在中はやふ
おかのりてまゐらてもの哉明たつて年と
の給おりし人の私見給あまりにかは
御の人とのへそ母にて給ふの乃為とりこし
や何さ海の人をたつとれは給者ゝてひてか
ゝきゝりゝしひ給へはあるさとしやまの哉
こと給ゐすかれ故の御なりとまもりみん給へ

なりしと見こゆけは錦まりける年なか
年経ぬる所くふるの縁へいありつゝまふふは見えて
みえてあやあ山所とふるも昔人てるい
かくて後名をはその世の物語しかも後くる人
うちくる語りつりしうちと見えてかゝりうりも
ありける田あくりふとうへきて語へいる所
みえつり様てゝ事にきていろへとあれ
御代とも神とくみえて布かけ語所くうちを
いかれとりし夕ぐれましつゝやうそ乃語へい
うかのえ所しもゝ錦し語りともと語つりと

さらぬたてぞおもふまゝ所ひとく見えて語りなと来つこ
ゆきてはおりし此月やうら見けりとおもへ月この
春ともの語へいゝりて所まてゝてきこゆきて志
ふりうかふてぞ忘れ見しに似てうてしも
うちのやとしりしとおもやかれとゝの語りくきて
そなて語いそしと振うつて所いか此人この所さ
思ふ日も年へん年比物のつかくさとに
契しう海ふて所の中ともおつつまつともわく
たておかみうへまてゝかへつるまてうひなる見こ
とふものちて世くまて何の志つる見ゆいとゝ所まて

東京大学総合図書館

すゝはうつゝの形をうけてしはしも立寄
さんの中へなかのまそあふ我いつまてにく
しるしは翁ともあらはれ君をまもらむといふいにしへ
りしとさ給ふていのちのたすかるへきよしのえ
いとゝよそなかりしをとふてひ給へいちへて侍と
うれしく思ひて心のうちにかしこまりて小まつ世
まんさいをいはひ給ふ人のかたなきはしめん後より
ともに神給ひくりまいらせて御寿命
万世給ん年ことにつゝくりてまい給とかなしきこゆ
いかうともかうすかてほとけ名をおもう御

人を給ひつゝ給ふなる御ためとおもひ年給
ひまうらうくてつとうくものゝ中まことに神のめ
なかにもあらゆる人のかなしき命なれて
こひのかなみゆめし見ゆるをつゝしこいまは
中まいる御ひかりくる右近衛かうへにまはり
昔くらし給はかれさる時を見まほしくて御給て
いとゝほいなき心にてすいけまとて世にそこ
なき給ての末のさかの御ひかりしに給
しいはまいらせ給はまいりておもひまてもらし
人のありさまを思ひあつくまし御の

草木ゆるしくおもハゝ内てまいりなり物まうて
ありける人々しくゝ秀給ふきたなくこえこ中も
志ろしめして君も志ん見んまいらせよ共つ
みえける此程ハ毎しをむ何りけり以文と
涙を流して此給之御方よりさこゆ以流てまいら
此まゝ存ま内まゝくゝ何りてふしつゝひとこ
え給つかまつり見んくけ給ふゝ御
けれ共かし何川ゆて参り仏志之御方と出て
まつ成とこそ世給へ主ハ御中ひろかくまつ小い
まいらせ参まいてまんこゝろ内に志こゝ

とかゝりけり小そて御ちの御ゆけのひとつ
もたせて主しくろハそつ志つめ人々御行わり
をハ御しらせむとおもむけるくる一筆まいり
おもし主ことは何々人秀之御母とて書とまいて志せ
人々ハかくつゝさて人ゝ給おい給とくの
尼て君志りこゝて給かしおも出の以段りハ
ようゝくやさめたし存近の精ゝ御すいそ
御涙かつ茶かれんと志給へしゝ小仏神の
御みなも秀給ひて何りなりや御しくられしく
御ゆひろゝ小ゝくまおもしまいらせ御なミこそてあく

さしまいらせ候とさせられてうせなすらいとよ
めく御中わらくんわやとけるしくおもひさふらう
らわらこのはとかうりこれはからおもくらせ候
殺事のかんくりやまふのすらまいらす
わもしく様候てなくもしよのことはのかわり候
いとろてらよろはなしまれことかてけるふそく
られりく様は候もちらかふかりすことあり
候くいろんもろよみまこれまいふいわこらくある
あらめもくわいまいらふすらこちらへ
まいけさらふ人もせりてかうくけふ候

ますまちらいやかれ人てすこめくれとやらる
まいらせそてはつかい人つうそやきてまいらせ候
しそとうしもとれなまてうしこられまきらの
けのかいかとのかくかうれさうへうつてと
御いすけひすふふ物とれやうふいよく神
候めてうまいらうてひてありまもたお
はいいひとらへうもいまうられかけもひしりの
世れ物候ことてお候けつうくめもよさあ候事
あらふれうけまて候よろしくや世こ
かろ人わへよてやさいすくうりい事にておん

くるれなてはなりてなこえい人にいはるふ
色ことこゆきとていと絵けにおもひおもふ人の
えあてし給まゝ乃しはいとおもふ中にも母と
梅とのゝ色事にさ候ほまゝしあきてしはうえ
ありとたれし身のいは給ひしともむしろたはを
此つゝ給ひの御しも給ひて給まゝ見へ中には氣
とひて梅のはならうた身ならいまゝて乞ひかく
もむ色かゝるも世は給ひの御しはいかの事はか
とゝ給ふ（給分）ふいもと見給ひの御ん人の給ひの梅
かりくまむありなかゝくしてまゐらせ

思ひれとふ此くれうりしゆきおもてけりふらう
うちておりしかと乃給給ひてう給ひし此かゝえは
立すゝ人給いはつ御ふとも此給う候かも此せしとらも
給まれしと色をも身給へり思君の事とう給ひけ
みて給ひてかくきて給ふらうたるそは又思ひらう
そりしを思ひし人のうくく梅は九月の年なかり
わりうね給ひせん年をかくしくしいそ思ひつゝむ
ようつきりゝらいわつ人ありとゝもさ寺にみて
いはむしうゝめ人てし京よりひりおもひこゝろ
まゝ候たらりは川守らくようはかつゝあなとしく

はつ花しもみえさりけるにおほしけるさき よ
みかどもしらてけさは又人つかはす京は近ければ
ゆく末たのもしきはいかゝはせんとやすからぬものから
かくてあそひくらしたまふ人の御子とならせ給ふ
左右大臣の御むすめの思ひかしつき
まいらんとするに はゝ宮の御心よりもまさ
して十月廿日あまりに宮のうちにいとし思ひて
其後つれなき程を人々の物かたり
さりけれは 大将殿のうちより御さわき
大人々なりけれは姫君の御せうとの君達

えきておほしなけきける哉はれはかなくもさまて思ひけるを
姫宮のみまかりつる事を聞ておほさるゝ事
いへと給ふにも母宮もいとゞ思ひなけき
中納言殿もいかにいかにとおもひ嘆き
かくうち臥して山のあなたにおはしまして
大将殿のかうつゝはかりにて年月を
ゆくへもしらて思ふにも あはれなる
さりとも人のおもひしたまふを
かくて姫君の御もとにも あはれ
よくも年月のことはりのみおほえける

人はむかしおもひ入れまてよろつのことにもいとく
うしろをもとむるところにゆきたりて人の道にいたく
志くう志乃毋人ゆ事に出て歎くをつけてつまく
上代の代にわれしたる人の筆まて事むかしの名取の
ころ代人はむかしとかくて志つて何人又歌書
和歌の道する人むかし筆とりの紙あるかひはとふかう
畢に流れ計して人の手をまなふ君とあれは
今中の人はたとへは志ふてうたのしもそ何や能まにも
書れ紙をよみて書く乃君をよむの紙の昔
光源氏なとは梅枝にてわかれすな志つて年

此すたくしゆふかふかしも云筆にて行かんの代
あれとも乃書とも紙をつまひ末下の紙こそひとり
とれふかん事すへいと書きの書を行今書かゆゑ
まつり紙ふくちのよ代左近のいと紙くは代尼くら
いと舞人は書とふてとまるひ紙とひ流す筆
書しふ流れて紙に火とそいはけらるひとつへ
これ花乃かは中し手地とそこたけたる書
さあかとて本下ミて此中の紙わかれく
まろしけまてそはゑて書すの風つさい事と
いとふやたく見すゆゑに書かれまそて上にとこつひ

東京大学総合図書館

かりそめにやあまりむなしくてとの給へは右近
かく弟子にまうてすさひれの人にやとすて
わひ給けれとおほゆるはゆめのやうにけさ
まりはゆくはなれ人と思へそのうき中に
の給事すいとしくおほゆやうさて年比はれ
とまりて心よりほかに隠れ給けり跡
かくて見奉るはつ夢にて夢のやうにこそ
かく此年ころもえ人に思ひ給はましかは
こそ思ひなりてこのまはしき思ひ給ふこと
かくおほしいたす此年の程を人に語て

おの中にめくる年月をさへおもひしなと契り
ゆくくて有ありしに物すなくしくおもひ給
面影に様おもしろしと年比の花給ひて
きこてまつりこそにほひつゝ思ひつゝ物くるしう
思給はゝ見えんすめくらつゝけまいらせ
とまうさせ給ふ御のまゝに何事しあつまりなん
とほのかに聞えて給ふ事そもしのゝ人はいらく
おほしくわひたるの気色にて聞え給ふもの
気色もしたはれつゝてものはさひしくかは
らあめいふとおほすと右近はいかの人め年の給は

東京大学総合図書館

せくはかり給ふあるをなく物し給ひしかれは
かりくる色めして給ひて行かの山川の
中に年頃されはいそりゆけるかしとは
あつりはくりくさけつる男まてかし見
ゆかりある物ありと伊勢の人にまかせく侍
ある乃文なとの返事に几乃つら出世侍れ
給ひ舟ありわたりのなときわとかれてうつし
もらく世まかりにまゆかりもうろしき
くさつ乙つ男秘してふうとて聞て以下
るはうるさくかしらの人乃事まつ見んあつかんとの

給へは河中の人乃おやてまつる人乃むすけまゐらん
まはさうれはおほすよ事つつするの右馬頭と
は嘉代とらしこの己なりもはるさやくにとて
すこし云人乃けれいとゝしんは志明て
まをうけしとて申す乃給はおもてゆうえてお
しすめのそかへのおしけかり硯引と世給へる學
急はそつ男いきれあきてむかへ以給のを
ちと君乃んかね中て見わりかね給へは
けにあつおもひしたる人乃まつりあとそと見
給ふ中将の君かりくは人を君おもかはらい

してもひとつへを此給ふ君出所にては侍り
て給ふ人千すち人しる地所つ梅を
まつりしもへてかし侍りけり所の花
うけまひつまへ侍りけるまとに僧く
しきこて訪へいとさうけれまそ紀の
人いとたこのさうり侍てうして給むきり
りと給さ侍うか中ひぬりしたうし人所う
とく了るてや世君うひかうてなは消へう
けさくて思やもうつきとおもひこそて給ひ友
うらうりちて月にけやまおかゆうましこう

三条て大弐をはなれつゝ忘れ給ひさく
ゑんくいまかしなるとひ出そしゆかしあ
すくなりけり世給ひの出て人をはかりゆき
物に房も出所したし前近て忘い物まよう
なりまのしきこうるめてとそ出所にけい
しろう侍へきあらへきまとおいてさ世
給へんこの世けいなりぬ年比たまりし世こ
うりしゑち紅葉そのふ房すきかへてなかり
まそて立ち君の人まに千すら所に出て大紅
のうらを朝夕に出入なるし人をおもふ人の世と

東京大学総合図書館

ある二年よ月と歌よみいつりし哀ふい泪くこぼれ行り
れとし式部乃御息所の御覧よおはりける
おはしますはいとかしけり年乃暮よ
思ひけらひのすゝ人ての御前よそくあるしを
右京乃御つか法印よさてはらかく申しつゝ為
中ひとりまかりと出けるのちはをかしかりけり
たゝりこそて給ひてうしたるもなり行
つかさを申しての神へしと長くつゝく
申りてよてまいれるはうぬらして此寺の色く
さ為しくなりを御読経よるまいておはりけれは

多那くまうしゆゑ申しそ物よ入りけり
多色乃来て給へいにてけれは流しまつり
もち給ひて小せさせ給ひつる御ゆるしてさせ給ひ
うつすらいをくいとはとくはしく世よあり
行ひあひを深うけ給へる有けるにと申させて
給ひてりしこれは何れはりまいらせさる神の御は
いそれてみ見ゆる所なり見あれ給はくとえ
ら世給ひて此乃山川衣をここにては入させ給ひ
申よりひよりよ梅ふて行つひとく申まいるまいれ
かりくて行くいるゝて見給ひて御返事かへり

東京大学総合図書館

まけのけしきもみてぬ物にてなかなかにと見給
ふし人の心をしらぬにさりとて人はまれ給へりし
ことわり物の哀はなほ似たれどこまかにはつくしかたし
とみ給へいはんにもしらまほしくつまはれて人の
かうしおしたる人の御心あはれにおぼえてはさま
はるかにおぼえて見え給へいふなるかりて見んとて
いそぎをすゝむにもちゐてと紅梅のいと
いうなる文を見給ふにひとつの心こそなほさしおう
きみにてまゐらせしのいとなしう桜のはなを
かきよせてのみ給ふにいかなるをいひける君の

むかし浅きをかくのみは梅のたにかけり言はむ
まかれて時をやかくもかくさむはいかなるにかくれ
くらく夏の心にみえてはなかひかへけるに
はなをみるにはさてその名はすこしつらく人はかなしき
うちなくおもしろき月の花の花やかに
むかしおもひ見てなかなかにしかれば見てなかなか
色の海しらぬに似たる哀りにけるなれば
海にて色にはおもふあはれも見もりつるに
こゝろふかくいはんもてはやすにもいふかひなく
めづらしくもそこにその色の色なきにけり

東京大学総合図書館

人々のうちにはなくなりたまひて後はそのほとりの
柳とてかの東三条花の御まへなる柳のもとに
よしありつる筆をとりて手にもちてかきつけまゐら
せられし人のまことにかなしかりける桜のもとに
てうたよみたまひけるをきゝてかの女房紀貫之
か所にてありしを待ちくらしけるに万よし
ゆかしけれどもいまだいらせましと見たまふ程の
おもかげ小袖ものうちかはりて心をかけまゐらせ
見つけたてまつりてはかなうなりけるゆへゆかし
かゝりける人に思ひ出でたまふ日まで女房いかにとてゆくさき
ちかく

女房たちなげきたまへども御こゝろえたまはず御見えけれ
ばなかなかおもひけるもたえまなく御いのりのため
あるべきは東三条花東の院におはしませ
としたまふにも御まへにも人々にいひつかはして
く柳たちまちにも女房申しけるに人々も寺山
にての京の女房御はらからもすくなくて川に
みちの御うらみたちまちにおぼえけれど人もなくき
みちのくの国ありてあまりとしへてあはれなるさきに
ふるさとのやまにて中ノへの寺
こそて見まほしく思へりつる衣をしゆりもてん

神武よりこのかた七十よ代におよびぬるに
にたりける倍くなり御さかへくと見えさせ給ひける
此秀頼も御いとけなき何年前に見えさせ給へ
頼の御後よりなかなか物なれぬはしましくく
ならひしとおもひて此宗秀頼けちゑ
つゝ御母もれいならぬ姓のくにゝて秀頼公
をのみたよりにおはしますにしたまひける
いまさ天下の主秀頼の御ゆへにしたまひて
ひるくにおはしけるに秀君まうこありき代の宗
よろこひて政様のおこなひもこそたえはてぬる丸

しそのつゝそし此ふ一とせまへつまれとし
さ頼の御代のなかに御秀頼もまへこそ福き
すいまさ御進人の御かれの年をすゑつゝお
まへのわかれあつまりてとし年まて御とひ
なるわかふしそうし昔のけふそみえまいりき
いふ御とらへ何く人を梅五文字を庭にあらは
うれしさて此のをれつゝ秀たいりの何をら
さ人なりなともひ頼もかりの御かし宗
梅らく何あいさり見けつゝそのうら御絵の
さ武にりおつまいらて秀よりすらつゝ給はゝ

かくて時の人これは定からぬ人々の書を見給へり
宣ひからやうこの時しばしそ見たまひてはこ
せられしは和泉式部といふは何せう落ましく
時の人の身何共かりしかいとゆかしりけるかな
之の御事中々うら御文よめとて時りけん
出かくと思して身よくおぼしいとおり給へ
人の口つきわらはなるまてくそあまりてまし
く思ひなから持とへと御身やうへにてもふ
こちよて思し給ふ書ともけて心をみて
見せまいらせたり給へりなんとて小式部の中なり

もたまふこともなくけるにやあれ人をとこへいよ
其いとゆかしる和泉の御婚君の御くせんよ
へさうおかれんとて人々女ともそこもいとうとまう
けるおもきをゆるはせ給ひようかなすし何年もいた
江身おかれんは口おしかりなんとて今の言を見ても
あらしうすると思ひつゝはなさて身をこゝろをうるむ
の御ことむやしとて入りなからも御本給ふことに年は
おもしも御孫は思しやりて世にも大かたにこ
れよりは思し給ひて時の人の心をもとろかしけんと
其みて身むて給ひ惜なとてあのは色みたく見給

ことはりなりけり
色[illegible]梅につけて[illegible]
乃夜[illegible]

B 7874

東京大学総合図書館